

素晴らしい須走を知りたい！

## 「すばらしい隊」養成講座 第2回講座概要

### 第1部：座学 富士山の女神 かぐや姫とコノハナサクヤヒメ

#### ■日時

令和3年10月2日（土）9時～12時

#### ■場所

須走地区コミュニティセンター

#### ■講師

○秋山 裕貴 富士山かぐや姫ミュージアム 学芸員

#### ■講義概要

##### 1. 富士山の神様って？

—富士山の神様は、浅間神社の神様、コノハナサクヤヒメ。富士山の神様について調べると、色々な神様仏様の名前が登場し、色々な側面や時代背景があるので分かりにくい。今日は、主な富士山と言えば？という神様について紹介する。それでも、天女、浅間大神、大日如来、浅間大菩薩、木花開耶姫命、かぐや姫…と言ったりしている。

##### 浅間大神（アサマノオオカミ）

—富士山の神様としてご存知だと思う。古くから日本で伝わる富士山の神様といえば浅間大神だと言われている。浅間神社は火山を祀る神社として存在する。本来、富士山限定ではない。浅間大神は噴火の神様で、火口により、噴火を司る神様。古代の人々は、噴火を繰り返す山を鎮めるために浅間大神をお祀りした。噴火の荒ぶる神、浅間神、浅間の大神と言われている。それとは別に富士山の神様の表現として、古代の古文書の常陸国風土記では福慈神（ふじのかみ）と言っている。古代の富士山は年中噴火しているイメージなので、噴火を繰り返している富士山の神様「福慈神」と噴火をつかさどる、火口におあず浅間大神が人々の認識の中で結びついていく。富士=浅間。今では浅間神社と言えば、富士山を祀っている神社が多い。

##### 「富士山記」

—古代(800年代)の都良香が書いた「富士山記」で富士山を紹介している。この中では山を「富士」、神を「浅間大神」としている。この頃には富士山と言えば「浅間大神」との認識があった。これには、山頂に美女が2人舞っていると語られている。富士山には神様として女人人がいるというイメージがすでにあった。富士山と言えば女神というイメージが根強く形成されていく。

##### 「大日如来と浅間大菩薩」

—古代は浅間大神をお祀りし、遙拝して祀るという方法がとられていたが、平安時代には、仏教が日本に浸透し、その考え方方が日本古来の「山岳宗教」や日本の宗教感と絡み合う。その中で修験道も発達してくる。日本古来の神様と外国由来の仏様の考え方方が一緒になる神仏習合の時代になる。その中で本地垂迹説ほんちすいじやくという考え方がある。本地仏=仏・菩薩の本来の姿があり、それがこの世に人々の前に現れる仮の姿として垂迹神。仏様が本当の姿で、神様が見える姿で、神様と仏様が一つの形となり、二面性があるという考え方。この考え方方が平安時代の中頃浸透してくる。神様仏様を祀る修験道が盛んになってくる。山にこもって修行して力を得ていく山伏がいる。だんだん日本各地の山に神様仏様を見出して、そこで修行をする修験者が増えてくる。富士山に関しても例外なく修験



者が入り、山の中で修行をする。そのなかで末代上人(1100年代)は、富士宮市の村山浅間神社(当時は興法寺)の大日堂を開き、富士山の修行に関して色々やった方である。この考え方には、浅間大神は本地垂迹説にあてはめると本地仏は大日如来、垂迹神は浅間大菩薩である。この考え方で、末代上人は仏様と言えば男性とイメージしているはず。浅間大菩薩、富士山の神様と言えば女神のイメージ。この矛盾があると思っていた。女の神様なのか、男の神様なのか分からぬ…。ただ曼荼羅などを見ると、大日如来はこの世の中心に存在する仏様。という事は性別も男も女もないと説く。富士山の神様が女神様だというイメージがある中で、本地仏が大日如来でもいいのではないかと本地仏を見出す。浅間大神、富士山の神様と言えば、大日如来が本地仏、垂迹神として浅間大菩薩と考えるようになり、それが人々に広がる。

### かぐや姫とコノハナサクヤヒメ

—「コノハナサクヤヒメ」は江戸時代の頃から次第に富士山の神様として認識されている。初期の浅間神社の神様として「コノハナサクヤヒメ」が出てくるのは、慶長19年の「集雲和尚遺稿」。駿府の浅間神社のことについて語ったものである。その祭神が木花開耶姫命だと説いた。コノハナサクヤヒメは古事記や日本書紀にも登場するが、漢字の表記が違うので、今回の主な話の中ではカタカナで表記している。この文書の中ではこの字を使っている。

—元和2年(1616年)に徳川家康に仕えた儒学者林羅山が書いた「丙辰紀行」では、神様のことについて書いている。そのなかで、三嶋大社の祭神は大山祇神を祀っていると言っている。大山祇神は山の神様、大地の神様として日本を代表する神様だが、当時、神様的に大社(三嶋大社)と富士(浅間大社)は親子の関係があると言い伝えがあると語っている。だとすると、富士の神様はコノハナサクヤヒメだと決まってくる、どこで言っている。つまりコノハナサクヤヒメが富士山、浅間神社の神様だという考え方方が江戸時代の前後に出来ていることになる。林羅山は神仏習合、日本古来の神様の存在と仏教の存在を分けて考えたいという方。なので、浅間大菩薩、かぐや姫、大日如来が富士山の神様だということに否定的だった。日本古来の神様がいて、コノハナサクヤヒメに置き換えていくことを唱え始める。林羅山が最初に唱えたかは分からぬが、有力な知識人、幕府に影響力がある人間や、大きい神社は幕府の管轄にあるので、幕府に影響を受けた大きな神社から長い年月をかけて富士山の神様がコノハナサクヤヒメだということがだんだん浸透していく。

—コノハナサクヤヒメが富士山の神様として語られていくなかで、そう信じるのは、特徴が富士山とマッチしているからである。①女神→人々に強いイメージが根強かった。②大山祇命の美しい娘。美しい山と言えば富士山、美しい神様と言えばサクヤヒメということがマッチしたのだと思う。③神話の話に、コノハナサクヤヒメが瓊瓈杵尊と結婚したら一晩で身ごもった。瓊瓈杵尊は一日で身ごもったことを疑い、コノハナサクヤヒメはその潔白を晴らすために産屋に自分で火を放って燃え盛る火の中で出産した。間違いなく神様の力を持った子供だと証明した。そのイメージから人々にはコノハナサクヤヒメは火の神様という認識があった。火と言えば、火山の富士山、という発想として受け入れやすい条件がコノハナサクヤヒメにはあった。浅間大神から始まり浅間大菩薩、大日如来を解釈し、浅間大菩薩はかぐや姫だと伝わっていたのを林羅山など一部の人たちが発信する中で、コノハナサクヤヒメと共に広がっていく歴史があった。

### 2. かぐや姫

#### 古典「竹取物語」

—成立年不明。9世紀後半と言われている。源氏物語の中で紫式部が「物語の出で來はじめの祖(おや)」という言葉を使い、こういう小説の一番最初のタイトルだと表現をしている竹取物語。なよ

竹のかぐや姫が、竹の中から赤ん坊が生まれてきて、おじいさんとおばあさんが大切に育てると、すぐに美しい女の子に育った。噂を聞き付けた5人の貴公子が求婚し、結婚する気のないかぐや姫は結婚の条件として無理難題、無謀な要求をすることで結局は結婚しない。かぐや姫のうわさを聞き付けた帝は文通から始まり、親交を深めていく。ある時からかぐや姫は嘆く。私は月の都の住人で、もうすぐ迎えが来るので、帝ともおじいさんおばあさんともお別れだと嘆く。帝は月からの迎えを追い払おうと思い、沢山の武士を用意する。しかし武士は戦おうと思うが力が出なくなり、戦うことができなくなってしまった。そしてかぐや姫はそのまま月に昇天する。かぐや姫は月に帰る時に帝に不死の薬を渡す。しかし、帝はかぐや姫のいない世界で死なずに生きても意味がない。こんなもん要らないから日本で一番高い山のてっぺんで燃やしてこい、と命令する。日本で一番高い山、駿河の国にある山で燃やしたところ、もくもく煙が出て薬が燃えていくというシーンがある。これをもって不死の山ということで、不死と富士をかけている。これが本来の竹取物語の内容。

### 富士山南麓のかぐや姫

- －富士市には比奈、原田と呼ばれる地区がある。ここにかぐや姫の伝説が多く残っている。ここが物語の舞台。古代は「姫名堂」ひなどうという場所だった。
- －かぐや姫は月ではなく富士山へ帰るというストーリーが富士山麓のかぐや姫。かぐや姫は富士山へ帰り、富士山の神様、「浅間大菩薩」になった、ということ。
- －「乗馬の里」という地名だった比奈・原田地区に竹を編んで生計を立てていたおじいさん、おばあさんが暮らしていた。作竹の翁(おじいさん)が竹林に入っていくと、光る竹があり、切ってみると中にかわいい女の子が入っていて、その子を連れて帰り、おばあさんと大切に育てた。大変美しい女の子に育つが、不思議なことがあり、この女の子は普段から良い匂いが体から出でていて、常に体から神々しい光が出ている。不思議な子として育つ。普段から輝いている様子から、この子の名前が「赫夜姫(かぐやひめ)」と呼ばれる。赫(かぐ)=輝くという意味がある。昼でも夜でも常に輝いているお姫様だということで付けられた。かぐや姫が16歳になった時に、富士に都の役人が通りかかり、休憩するためにおじいさんの家に寄る。その人が初代征夷大将軍、坂上田村丸(坂上田村麻呂)。向こうの部屋が明るかったので、こんな夜に松明でも焚いているのかと問うと、おじいさんがうちの娘だという。見てみると、大変美しく、体から光を出している。帝のお妃候補にならないかと話をする。帝は桓武天皇の時代だとここでは書かれている。しかし、この話を聞いて、かぐや姫は「帝と結婚することができない」とおじいさんとおばあさんに打ち明ける。この後、富士山に登り、洞穴の中に入らないといけないので、皆さんとお別れしないといけない。だから、帝とは結婚できない。おじいさんとおばあさん大変驚いた。そのころの富士山は、神様仏様が棲む人間が立ち入ってはいけない恐れ多い場所という認識だった。それでも私は富士山に登るので、いなくなつても会いたい時は会いに来てくれればいつでも会える。この噂を聞き付けた駿河の国中の人たちは駆けつけてかぐや姫が帰る時に集まり、涙を流して別れを惜しむ。その場所が憂涙河(うるいがわ)という場所。今も富士市に流れている潤井川はこのかぐや姫の伝説の涙の川だった。富士山の湧き水が集まりでてきた川。富士山との絡みが川から表現されている。かぐや姫はみんなから別れを惜しまれながら、登っていく。あまりにも別れるのが悲しすぎて、富士山に入るのが畏れ多すぎて人は入れないはずが、みんな付いてきて途中まで一緒に登る。すると、途中振り返り、「ここからは一人で登るので、皆様ここでお別れをしましょう」と言った。その場所が「中宮」。現在、中宮八幡堂がある場所。お別れの歌を詠みあい、ここからは一人で登る。富士山頂に着くと、いくつか高い峰があり、その中の一つの釈迦嶽という所があり、そこに洞穴があり、その中に入っている

く。すると、かぐや姫の姿が変化し、実はかぐや姫は「浅間大菩薩」という富士山の神様だったと表記されている。この話を聞き付けた帝はあきらめきれず、一度は会ってみたいと都から駿河まで来て、おじいさんを案内人として富士山を登っていく。帝が休憩の時にかぶっていた冠を隣の岩に置いた場所がのちの「冠石」だと紹介されている。冠石は今、どの岩か分かっていないが、江戸時代に富士山の頂上付近の名所の一つとして伝わっていた。さらに登ると無事にかぐや姫と会うことができ、一緒に暮らしていきたいということで、二人一緒に洞穴に入り、めでたしめでたし…というストーリー。その後、おじいさんとおばあさんも神様になった。おじいさんは「愛鷹権現」、おばあさんは「犬飼明神」。

#### 話のポイント

- －「赫夜姫」という名前。夜でもいつでも輝いているのでこの名前が付けられた。古代の富士山は、富士山の頂上付近は火口が噴火していた。昔は小さな噴火も多く、夜中になると薄暗く、山頂の方がほのかに明るくなっている様子は当時の人からすると見慣れた光景だったかもしれない。こういう事を表現しているのではないかと思う。
- －恐れ多い富士山に踏み入り、私にいつでも会いに来てねと言っている。実は重要なこと。富士山の神様であるかぐや姫がそれまで入ってはいけなかつた富士山に入ることを許可した。現在(当時)も人が入っていたが、富士山に人が入る理由を説明している。ストーリーの最大のポイント。

### 3. 富士山縁起のかぐや姫説話

- －絵本の出典は、「富士山大縁起」元禄 10 年(1697 年)に書かれたもの。巻物で、全部伸ばすと 8 m 位ある。その中の一説。富士山の事について色々な事を書いている。「富士山縁起」は富士山、富士山信仰に関する神社やお寺、伝説など富士山に関係することをまとめた縁起書、書き物の総称をいう。富士山縁起で「富士山大縁起」というタイトルが付けられたものを今ご紹介した。
- －「富士山縁起」とは、富士山信仰に関わる宗教者たちがまとめた。富士山がいかに素晴らしいのか、富士山をよく知ってもらうためのテキストとして書かれた。自分たちが信仰の対象としている富士山がいかに素晴らしいものか伝えるもの。その中にかぐや姫の伝説を掲載し、富士山南麓周辺のかぐや姫伝説がこんなものがあると紹介していた。
- －「富士山大縁起」が元禄 10 年(1697 年)に書かれたと言ったが、原本があり、それを書き写したのが 1697 年である。元々あったものを書き写したので、この伝承がもっと古い時代からあったというのが分かる。
- －現在、富士山に登るかぐや姫が浅間大菩薩になったストーリーが確認される最も古い資料は、横浜の金沢八景にある称名寺で保管されている寺本「富士縁起」で、国宝に指定されている。現存するもので一番古いく、鎌倉時代末期頃に書写されたものだと考えられている。鎌倉時代の末期までは遡れるし、もっと前から伝わっていたのではないかということを証明してくれるもの。女が富士山に登って釈迦嶽の岩窟に入り、浅間大明神になるストーリー。

#### 富士山縁起と東泉院

- －「富士山縁起」は富士市にあった富士山東泉院に複数あり、それが十数年前に明らかになる。お寺は明治初めに神仏習合の関係で廃寺になり、それを引き継いだ家が蔵付きの家を市に寄贈し、詳しく解説していく。まだ富士市の人も具体的なストーリーを知る人は少ない。東泉院は江戸時代に活躍したお寺で、富士市域の富士山を祀る 5 つの浅間神社(=下方五社)を統括するようなお寺。下方五社：富知六所浅間神社、滝川神社、今宮浅間神社、日吉浅間神社、入山瀬浅間神社。
- －東泉院本の最も古いのは、永禄 3 年(1560 年戦国時代)に書き写した「富士山大縁起」。先ほど紹介

した細かいストーリーが載っているわけではないが、下方五社の由緒や祭神、縁日について書かれている項目にかぐや姫伝説に関わることが書いてある。一つは新宮(滝川神社)。愛鷹権現を祀っている。愛鷹はおじいさん。滝川神社は、かぐや姫が生まれた場所でおじいさんをお祀りしている場所だと言っている。今宮浅間神社は犬飼神=おばあさんを祀っているというのが良く分かる資料。これが天文15年(1546年)六所宮から発見し、その後に書き写した、と書いてある。承和5年に書き写したと書かれているが、これは眉唾。承和ではなく、正和(1312~1316年)の誤記で鎌倉時代末期ではないかというのが今の研究の見方。としても、鎌倉時代 中世初めの頃からこの伝説があったのではないかということが読み取れる。

#### 伝承の広がり

- 臨済宗中興の祖と呼ばれている、白隱禪師もかぐや姫に魅入られた人の一人で、かぐや姫伝説のある比奈という場所にお寺を建てている。そこはかぐや姫伝説が残る聖地だと語っており、自身のお墓の一つとして現在祀られているが、とても重要視していた。この人はお墓を三ヶ所作るが、そのうちの一つにかぐや姫の伝説の場所を選んだ。境内地を「赫夜仙妃誕生育聖跡」としている。
- 他にも近世以降、いろんな文書の中でこの場所にかぐや姫の伝説があると紹介された。肯定的、否定的、色々あるが、多くの人が地史とかで紹介するくらい浸透している。
- 江戸時代中期の南口の「駿河国富士山絵図」の中の比奈村の横に「カクヤヒメノ古跡」と表記がある。これくらいこの話は広がっていた。
- 江戸時代の東海道の観光ガイドブックのような「東海道名所図会」にも、この場所、富士の吉原の所「竹取翁かぐや姫」というタイトルで語られている。あるいは歌川広重の浮世絵「東海道五十三対 原 竹とり物語」の中には原宿と富士の吉原宿の中間が原田・比奈地域だったので原宿周辺のことだということでかぐや姫が紹介されている。この二つは、細かいストーリーには触れていないが、江戸時代から浸透した話だと分かる。
- 富士市の比奈、原田地区の中に史跡が集中している。この辺がかぐや姫が育った場所として史跡が残る。そうやって紹介されていく中で人々の生活の中にかぐや姫が溶け込んでいったのが分かる。

#### 4. かぐや姫伝説の真意

- 古代までの激しい噴火が比較的収まり、中世から富士登山が盛んに行われてくることを背景に、こういう伝説が生まれたのではないか。
- 聖域である富士山に人が登ることを認めてくれている、導いてくれているというということを説明している。
- 富士山信仰における宗教者たちが、富士山がいかに素晴らしいかを伝える一つのストーリーなので、荒唐無稽な話ではなく、あくまで富士信仰の歴史に直接かかわってきて、それによってかぐや姫=富士山が伝承してきた。

#### 5. おわりに

- 富士山の神様と言っても、時代ごとの環境や人々の認識によってとらえ方が異なってきた。浅間大神、不死の神、大日如来、浅間大菩薩、コノハナサクヤヒメ、かぐや姫など神様の表現も変わる。古くから多くの人が富士山を重視して敬ってきたことがよく分かる。
- 現在浅間神社で祀っている神様はコノハナサクヤヒメ。そこには深い歴史があり今に至ること、富士山の神聖さをうまく伝えてもらいたい。